様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月１０日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２０７２２
研究課題名（和文）　人間の安全保障の観点による上海のユダヤ人難民社会の研究

研究課題名（英文）　Research of the Jewish refugee society in Shanghai by the viewpoint of human security

研究代表者
阿部　吉雄（ABE YOSHIO）
九州大学・大学院言語文化研究院・教授
研究者番号：70231975

研究成果の概要（和文）：本研究は、1938～1951 年に上海に存在したユダヤ人難民 1 万 7000 人のコミュニティについて、我が国の外交政策における基本方針のひとつである「人間の安全保障」の観点から分析した。このコミュニティでは様々な地域出身のユダヤ人難民たちが協力し合い、「恐怖からの自由」のためには医師や看護師たちによって伝染病や栄養失調の被害が最小限に抑えられ、「欠乏からの自由」のためには職業訓練や職人組合の結成、コミュニティ内の経済の活性化が行われた。

研究成果の概要（英文）： This Research analyzes the Jewish refugee society of about 17,000 members in Shanghai by the viewpoint of human security, one of the basic diplomatic policies of Japan. In this community, Jewish refugees from various areas cooperated to attain human security. For "freedom from fear", the doctors and nurses worked to minimize the victims of epidemics and malnutrition. For "freedom from want", the craftsmen introduced vocational trainings and organized trade associations. The economy in the community was also activated.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	300,000	90,000	390,000
２０１０年度	200,000	60,000	260,000
２０１１年度	200,000	60,000	260,000
総　計	700,000	210,000	910,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：上海・ユダヤ人・難民・人間の安全保障

１．研究開始当初の背景

（1）第 2 次世界大戦を含む約 13 年間（1938～1951 年）中国上海に中欧・東欧系ユダヤ人の難民社会が存在した。彼らは 1938 年 3 月のナチスドイツによるオーストリア併合から 1941 年 6 月の独ソ戦開始に至る時期に、ナチスによる迫害やドイツ軍の侵攻に追われ、当時入国ビザが不要だった上海租界に逃れた約 1 万 7000 人のユダヤ人である。

彼らの多くは当時日本軍が管理していた蘇州河以北の虹口・楊樹浦地区に居住した。第 2 次上海事変で被害を受けたこの地区は家賃が安かったからである。1943 年 2 月の日本軍の布告により、市内の他の地区に住むユダヤ人難民も虹口・楊樹浦の中の約 2 ㎢の指定

地域（いわゆる上海ユダヤ人ゲットー）に居住・就労を制限され、終戦までそこに留まった。

（2）上海のユダヤ人難民社会に関する研究は 1960 年代の Herman Dicker による紹介から始まり、1970 年代の David Kranzler の多面的な記述によりその基礎が構築された。上海移住から 50 年が過ぎた 1990 年以降 Ernest Heppner を始めとするかつての難民のメモワールやインタビュー集が出版されるようになり、1990 年代半ばからはそれらのメモワールを参照した研究も Marcia Ristano や James Ross らにより開始された。2000 年頃からはアメリカやドイツに保存されている公文書の発掘とそれに基づく実証的な研究が Astrid Freyeisen や Christiane Hoss らによって始められた。2005 年に発表された丸山直起の『太平洋戦争と上海のユダヤ難民』は、上海にユダヤ人難民社会が生まれるに至った政治状況を解明する優れた国際関係史的研究である。

２．研究の目的

（1）本研究代表者（阿部吉雄）は上海のユダヤ人難民社会について、その実態を解明すべく多方面の資料を用いて研究を行っている。ユダヤ人難民たちは戦時下の上海における劣悪な環境の中を生き抜かねばならなかったが、その過程で中国人との共生と異文化理解、西欧キリスト教社会に同化していたアイデンティティの再構築、民主的選挙に基づく自治、共同体における連帯意識の強化、失業者への職業訓練や起業支援、伝統的な家父長制社会から男女共同参画社会への移行などを経験した。その研究を通して今日世界中で頻発する紛争や災害による難民問題、さらには現代社会全般を考察する上で有用な視座が得られるものと考える。

（2）本研究の目的はまた、上海のユダヤ人難民社会が行った危機的状況の克服への努力を「人間の安全保障」の観点から分析し、現代の難民問題を解決するための知見を得ることにある。国連開発計画（UNDP）が 1994 年に提唱したこの概念は 2003 年以降日本の新 ODA（政府開発援助）大綱における基本方針のひとつとなっており、個々人やコミュニティの生活に潜む脆弱性の克服を通して貧困を減らし、紛争の予防・解決や平和構築を目指すものである。

３．研究の方法

本研究は上述の先行研究を踏まえつつ、最近見つかった各種資料（難民が発行した新聞、各種名簿、メモワール等）やこれまで利用されなかった日本や中国の公文書から得られる様々なデータを有機的に組み合わせ、上海ユダヤ人難民社会が自らの持続可能性を目指して、いかなる現状認識や将来の予測に基づき共同体としてどのような施策を講じ、また個々人が行動したかを明らかにしようとするものである。

４．研究成果

（1）2009 年度は、難民社会における人間の安全保障にとって最も重要である医療・公衆衛生の問題を取り上げた。
①上海に到着したユダヤ人難民 5351 人の住所録『上海移住者住所録』(1939 年 11 月)と、彼らの多くが住み、後に全ユダヤ人難民に居住地（上海ユダヤ人ゲットー）として指定された虹口・揚樹浦地区を管轄する提籃橋分局特高股が 1944 年 8 月に作成した『外人名簿』（1 万 2309 人のユダヤ人難民を掲載）およびその他の資料の照合により、医師の人数・住所・就業場所等の動向を追跡し、上海ユダヤ人難民社会における医師の特殊性を分析した。

上海のユダヤ人難民の中には 200 人以上の医師、180 人の歯科医、120 人の看護師がいた。医師に関しては、OECD の調査による 2006 年の日本の人口 1000 人当たりの（医療従事している）医師数 2.1 人の約 5.6 倍である。看護師も 2006 年の日本の人口 1000 人当たり 9.4 人に比較しうる 7.1 人である。

出身地に関して言えば、旧オーストリア国籍の医師はほとんどがウィーン出身であり、ドイツ国籍の医師もベルリンに集中している。

経済環境の違いから、ユダヤ人難民の多くがヨーロッパで習得した職業を上海で生かすことができなかったが、医師は例外だった。またユダヤ人難民の多くが蘇州河以北の虹口・楊樹浦地区に居住したのに対し、医師の 7 割は蘇州河以南の共同租界やフランス租界に居住・就業したことから、アメリカ人、イギリス人、フランス人など上海の欧米人社会を対象に医業を行っていたことが窺える。ゲットー設置後も医師の半数以上がゲットーへ移住せず、以前の診療所での勤務を続けることを許されたか、内陸部へ移住して中国軍や欧米のミッショナリーに参加したと見られる。
②中欧出身のユダヤ人難民たちが上海において直面した未体験の亜熱帯気候・衛生環境・伝染病や戦時の栄養失調は、人間の安全保障にとって重大な脅威だった。当時の新

聞・難民のメモワール等の各種資料や先行研究を基に、医師たちが資金不足・物資不足と闘いながら、問題を解決していった過程を明らかにした。

上海の夏は摂氏 40 度近くになり、湿度も高い。これに貧弱な衛生条件が加わり、ヨーロッパ出身のユダヤ人難民たちが経験したことのない赤痢、腸チフス、マラリアなどが次々に流行した。寒い湿った冬も、インフルエンザや呼吸器系の疾病をもたらした。

上海在住のユダヤ人や海外のユダヤ人組織による難民支援委員会は、各ハイム（最も貧しい難民 2000 人用に数か所設置された収容所）に外来患者を扱う救急診療所と薬局を置いた。さらに移住者病院、隔離病棟、歯科病院、眼科病院、産科病棟、レントゲン室、中央薬局を設立した。

医師たちは、上海に到着した船に赴き、上陸前の難民たちに天然痘の予防接種を行い、水は沸騰させてから飲むように、また果物や野菜は洗って調理したものを食べるように指導した。1941 年 12 月に太平洋戦争が始まると、輸入に頼っていた医薬品の入手が困難になり、医師や薬剤師は中国の薬草や漢方薬の中から効果のある代用品を見つけ出そうと努力した。ヨーロッパでほとんど扱ったことのないさまざまな病気に関する知識と経験を共有するため、医師の協会が設立された。

（2）2010 年度は、上海のユダヤ人難民社会の代表的な新聞『Shanghai Jewish Chronicle』、および難民の職業教育を取り上げた。

①上海のユダヤ人難民の大部分が移住した 1939 年に発行された『Shanghai Jewish Chronicle』紙のうち、保存されている版のすべての記事を分析し、難民たちの関心がヨーロッパの戦況や上海への親族の呼び寄せ、さらにはアメリカへの再移住に集中し、パレスチナにおけるユダヤ人国家の建国というシオニズムの原点には向かわなかったことを明らかにした。

また、スポーツ・音楽・演劇等の活動を伝える記事の多さから、ユダヤ人難民たちが上海に生活の根を下ろしつつあることが窺える。同様に、ユダヤ人難民の子弟向けの上海ユダヤ人青少年協会学校やタルムード・トラー（6 歳以上の男児にヘブライ語やユダヤ教を教えた）への入学手続きの案内も、難民の単なる集団からコミュニティに移行しつつある上海のユダヤ人難民社会の状況に対応するものと捉えられる。

上海へ逃れたドイツ・オーストリア系ユダヤ人はキリスト教西欧文化に同化され、多くの難民は自分をユダヤ人としてではなく、ドイツ人・オーストリア人と認識していた。しかし彼らはユダヤ人であるがゆえに迫害され、現在、そしておそらく今後しばらくはユダヤ人として世界各地の同胞から支援を受け、ユダヤ人社会の中で生きていくという現実を前に、自己の中心にユダヤ性を置くというアイデンティティの再構築を迫られていた。そのためユダヤ教やヘブライ語（およびそれらに関する記事）への関心は自ずと高まった。

②「人間の安全保障」を構成する２つの柱「恐怖からの自由」と「欠乏からの自由」のうち、後者を確保するためには、難民たちが上海で就業できることが必要であった。そのため、ヨーロッパで習得した技能を生かせない成人や初等教育を終えた 14 歳以上の若年者に対し、英語教育や職業訓練が組織的に行われた。その際、19 世紀のロシアで誕生したユダヤ人職業訓練組織（ORT）の導入や職人組合（ギルド）の結成など、ユダヤ人や西欧の伝統を活用した。

ORT では錠前屋、大工、電気技術者、製本、ファッションデザイン、造園・園芸、仕立屋、美容師、菓子屋、革職人、毛皮職人、ラジオ修理工、金細工師、歯科技工士など 21 のクラスで 6 か月間無料の訓練が行われた。ギルドはゲットーの設置により縮小した市場において、賃金と価格を管理するとともに、訓練と免許の基準を確立することに成功する。

ORT は支援委員会によるトップダウン・アプローチ、ギルドは草の根のボトムアップ・アプローチであり、両者が融合して、親方の下にいる見習いのための補足学校を開校した。そこでは 14～21 歳の見習いが、自分の選んだ領域において、実地の仕事だけでは得られない理論的知識に関する授業および一般教養の授業を受けることができた。

これにより労賃の安い中国人職人との競争に耐える高いレベルの技能を確保するとともに、出身国の異なるユダヤ人同士の協力により、様々な難民の集団から真のコミュニティへの成長が実現した。

（3）2011 年度は「人間の安全保障」を構成する 2 つの柱「恐怖からの自由」と「欠乏からの自由」に関連するテーマを取り上げた。

①上海の提籃橋分局特高股が 1944 年 8 月に作成した「外人名簿」（のべ 1 万 4794 人、うち 1 万 2309 人がユダヤ人難民）、在上海ポーランド総領事館の 1934～1941 年の登録名簿（のべ 1550 人）、在カウナス日本副領事杉原千畝が 1939 年 7～8 月に日本通過ビザを発給したユダヤ人難民名簿（2140 人）を照合した結果、最大 594 人のポーランド系ユダヤ人がリトアニアを経由して上海へ逃れたことを確認した。

さらに、

１）杉原リストと他の名簿との氏名表記のずれから、緊急を要する難民救援においては後

になるほど作業が不正確になること、
２）ユダヤ教のラビや神学生が太平洋戦争前や戦争中に上海を離れており、困窮度とは別の選別基準が存在することが明らかになった。
②ユダヤ人難民の大部分が移住した 1939 年に発行された『Shanghai Jewish Chronicle』紙のうち現存する版の広告を通して、難民たちの経済活動を調査した。その結果、
１）衣（ヨーロッパから持参した服の修繕や仕立て直し）、食（ヨーロッパ風の飲食業）、住（バス・トイレ・ガスなどを備えたヨーロッパ水準の不動産の賃貸）関連の商売は早期に始まった、
２）著名な医師や高級仕立屋は、英語版の広告によって上海の外国人社会へ参入しようとした、
３）上海の外国人社会の市場を意識し、英語能力のある代理人を求める広告がある、
４）「元…」と、ヨーロッパでの広告主の経歴を謳う広告がある、
５）「ドイツ語が通じます」のように英語が話せない移住者の不安を衝いた広告があり、難民社会内での商売が成立していたことが読み取れる、
６）難民が持参した貴金属（金、銀、プラチナ）や貴重品（ダイヤモンド、時計、クリスタルガラス、陶磁器、ペルシャ絨毯、絵画、ブロンズ像、毛皮、革製品、スーツ、タイプライター、切手）の買い取りビジネスが盛んだった、
７）起業するための資金不足から、資金提供・共同経営者募集の広告が多く見られた、
８）ラジオの製造・販売の広告から、娯楽の手段としても、またヨーロッパの戦況を知る情報源としても、ラジオが大きな価値を持ったことが分かる。同様に映画も人気を博した、
９）トコジラミ、シラミ、ゴキブリ等の害虫を駆除し、ソファやベッドのクッションを加熱乾燥する業者の広告から、高温多湿の上海で難民たちが苦しんだことが窺われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）
①阿部吉雄、資料調査：上海のユダヤ人難民新聞『Shanghai Jewish Chronicle』(1939) の広告から、言語文化論究、査読無、28 号、2012、225-234
②阿部吉雄、資料調査：杉原リストと上海のポーランド総領事館の名簿、言語文化論究、査読無、27 号、2011、103-120
③阿部吉雄、上海のユダヤ人難民社会における職業教育、言語科学、査読無、46 号、2011、1-9
④阿部吉雄、資料調査：上海のユダヤ人難民新聞『Shanghai Jewish Chronicle』(1939 年) の記事から、言語文化論究、査読無、26 号、2011、155-170
⑤阿部吉雄、言語科学、上海のユダヤ人難民社会の医療、査読無、45 号、2010、85-95
⑥阿部吉雄、資料調査：上海のユダヤ人難民社会の医師、言語文化論究、査読無、25 号、2010、169-174

６．研究組織
(1)研究代表者
阿部　吉雄（ABE YOSHIO）
九州大学・大学院言語文化研究院・教授
研究者番号：70231975